

## ◎はじめに

ご紹介いただきました、内海です。今日は、何で情報通信分野では韓国に負けるのかということについて話をしろと言われましたが、メンバーを拝見しますと、まさに情報通信分野のご専門の方々がたくさんいらっしゃる。ちょっと失敗したな、軽はずみをしたと思っているのです。[笑]

私は8年間ジュネーブにいまして、帰ってきましたらやっぱり浦島太郎で、いろんなことを感じまして、日本は随分変わったなと。そして帰国した当初、自分のこれからの任務は何かというと、外から見た日本がこうなんだから、こうあらねばならないということを皆さんに告げるのが自分の任務じゃないかなと思ったわけです。そのころにちょうどJサット（JSAT）の磯崎社長とお会いしたら、こういうのがあって話をしてくれと言われました。正直言ってそのときは、これじゃだめだということを、みんなに話さなきゃいかんと思って燃えていましたから、分かりましたと言って、いいチャンスを与えてくれたと喜んでいたわけです。半年ちょっとたちましたら、だんだん私も日本になれてきて、当初おかしいなと思っていたこともあんまり思わなくなってしまうと、帰国した当時は非常にパンチが効いた話をしていたのが、このごろ話をしますとパンチが効かないんですね。[笑] ですけど、当時思ったこと、それから今思っていることを、国際競争力というところにフォーカスしてお話し申し上げたいと思います。

## ◎ジュネーブから帰国して感じたこと

その前段として、帰国して何を一番感じたかということ、だれも考えなくなった、どうして日本人はまるきり考えなくなってしまったのかなと思いました。さらに一言で言うと横並びで、みんな周りのことばかり考えて個性がまるっきりないというのが結論なんです、それを感じたことがいろんなものすべてに通じるのじゃないのかなという気がします。そしてもう1つ、ジュネーブにいる8年間の間で、自分も含めて何で日本人はこんなばか正直なお

人よしの国民なんだろうなというのをずっと感じていました。この2つが、私にとってはいろいろなことの座標軸ようになってきました。ジュネーブへ行く前は、新聞を読んでも、ニュース解説を聞いても、いろんなことを勉強しても、それをすんなり、あ、そうか、そうかとすっと入ってきました。あんまりひねくれていなかったのですね。帰国してみますと、ニュース解説を聞いても、いろんな政治の動きを見ても、あるいは産業界の動きを見ても、何だこれ、ここはおかしいと、すべてのことについて批判的にものを見るような座標軸みたいなものが出来たのです。いろいろ考えてみますと、自分が自分なりの意見を持って物事を見るという、これは先ほど申し上げました2つが座標軸になって物事を判断しているのだと今、感じております。

#### ◎日本のIT産業の国際競争力

前置きはこのぐらいにしまして、日本のIT産業の国際競争力がどうなのかというときに、私は日本の技術力、人材、普及レベルすべてトップ、絶対にそうだと思います。帰国してすぐ、国会議員の先生なんかからよく「何で日本の情報通信は駄目なんだ。どうして駄目なんだ」と聞かれるのですけれど、私のほうが「先生、駄目なのじゃなくて、一番トップですよ。何で駄目だと思うのですか」と聞くのです。そうすると、あんまり回答はない。何だか分からずに、新聞なんかを読んでいて、駄目だ、駄目だというふうに入っているものだから、駄目なんだと言っているわけです。

ITUでいろんなデータをつくる時、1つの例ですが、電話料金とかそういうのを基本的なデータにしますが、日本はトップじゃない、下のほうなんです。そのデータを発表すると、旧郵政省（現総務省）が慌てて電話をかけてきて「何だ、こんなとんでもないデータを発表して」と毎回怒られる。

「だけれど、それはITUが調べたとおりのことを発表するので、マニピュレート（manipulate; 上手に操る）することは不可能ですよ」と。それでよく調べてみますと、ITUが調査で電話料金を聞きますと、日本はいわゆる基

本料金みたいなものを報告するわけです。ところが、大抵の国は一番安い料金のところを報告する。例えば携帯電話ですと、今回、えらい競争をしてドコモもauもみんな基本料金半額とかいう格好になっていますよね。だけれど日本が報告するときは、基本料金の額で報告する。韓国は何で報告するかというと、半額のほうで報告する。だから料金が全く違ってくる。要するに日本人はばか正直だから、料金体系を聞くと基本のものだけをやる。実際のサービスはいろんなディスカウントがあって、そのとおりに使っている人はだれもいない。だけれどそういう現実を報告しない。もう説明にも及ばないと思いますが、人材にしましても、日本人ほど真面目で責任感を持って一生懸命やる方というのはいないと思います。すべてトップです。

#### ◎日本の競争力不足

しかしながら、何で国際競争力がないのかということなんです。携帯電話で見ましたら、日本の携帯電話は世界の市場のほんの数パーセント以下です。本当にどこに行ったって見えやしない。あるのはソニーエリクソン（ソニーとエリクソンの合併会社）ぐらいです。私の実感としては、日本の国内を除くと1%にも行っていないような実態です。ところが製品のレベルでいえば、日本の携帯電話の製品にかなうものはまずどこを探してもないと思います。競争力がないのじゃなくて、競争力がある商品はあるのだけれども売らないのです。そもそも売るような努力を全くしていない。まず世界標準に合うようなものをつくらなかった。これはGSM (global system for mobile communication; 汎欧州デジタルセルラーシステム) のことを言っています。それから高品質、高価格ということで、世界のニーズに合ったものを全然つくっていないわけです。世界のニーズに合ったものをつくってなくて全然売れないというのは、そもそも競争の場に行っていないのですよね。それでGSMをやらなかったから売れないとか、あるいはそんな安いものは日本はつくっていないから売れないんだと言っているのですが、韓国だって

GSMをやっているわけではないのです。全然やっていませんが、韓国はGSMの端末のニーズに合った安いのもっと高いのも含めて製造して、果敢に世界に打って出て、今や恐らく20%か、最近ではノキアをしのぐぐらいになっていますから大変な状況になっていっているわけです。

じゃあ、ここで韓国と日本の差は何だろうかと考えますと、皆さんもご専門の方がいらっしゃいますから、この中にサムソンに技術で負けると思われる方はまずいないと思うのです。うちのほうが絶対勝つと思っておられると思うのです。私もそう思います。技術力ということでは、日本がやる気になれば何でも出来る。負けているとは絶対思わないのです。じゃあ一体、何が足りないのかということと考えますと、もう一言、バイタリティ、やる気、それが全然ない。

ITUが世界で「テレコム」というイベントをやっているのはご承知だと思います。1999年の世界テレコムは最大のイベントで、ノキアの人たちはホテルがとれなくて、みんなフィンランドからジュネーブまで毎日飛行機で通勤した。南米の人たちはマドリッドから通勤しなきゃいけなかった。それぐらいものすごい大イベントだったのですが、そのときは日本のメーカーもたくさん来て一生懸命にやってくれました。ところが2003年だったと思いますが、アジアでテレコムを開催しました。そのときに韓国とタイとがホストをすごく競い合って、バンコクか韓国かどっちでやるかというので私も大変困ったのですが、いろんなことを考えて韓国を選びました。そこへ世界じゅうの、少なくともアジア地域の郵政大臣、それから関係会社の社長が来ました。実はそのときは釜山で開かれたのですが、アジア地域だけじゃなくて世界から10数名、地域以外の大臣も来ました。そういう展示会、しかも東京のすぐ隣の韓国で開かれるのに、日本はだれも参加しないというのです。別にITUは日本のメーカーが来てくれなくても全然構わないけれども、アジアじゅうの通信大臣が来て、トップの方々がみんな来られるところで日本の産業界

のプレゼンスなくしてどうするのですかということで私が一生懸命に方々へ声をかけると、通信機械工業会だけは、やらんといかんと言ってやってくれました。やってくれたのはいいのだけれども、約300㎡の部屋より小さいぐらいのところでは各社が1メートルぐらいのパネルを張りつけただけ。一方、韓国に限らず、ほかの企業もものすごい展示をやっているというのが現状なんです。

もっと言いますと、あれはアフリカのヨハネスブルクでしたか、あるいはカイロも同じだったのですが、アフリカテレコムというのをやりましたら、日本の企業の出席はゼロなんです。10数年前、私は当時、郵政省の役人をしていたのですが、カイロのITUのアフリカテレコムに行きましたら、そのときはたしか各企業の社長さんはいなかったですけど、少なくとも専務の方々がたくさん来られていて、日本のプレゼンス（presence; 存在）がいっぱいあったわけです。その皆さんと一緒にピラミッドを見学した記憶があります。ところが私が任期中にトータルで3回のアフリカテレコムがあったのですが、日本の企業はその3回のどれにも出席しなかった。そこには中国、韓国の企業がいっぱい来ている。私は中国の企業の方に、自分の国に大きなマーケットがあるのに、何でこんなアフリカまで来るのですかと聞いたら、向こうは非常にけげんな顔をして、何でそんなバカなことを聞くんだと言うわけです。これは7年前の話です。我が社は今、世界の企業になろうとしている、それで何でアフリカへやって来たらだめなんだと逆に絡まれてしまった。帰国して某トップメーカーの社長に「こんな状況ですよ。どうしておたくは来ないのですか。前は来ていたじゃないですか」と言ったら、「いや、あそこへ行ったって別に商売はできないしね」とかいう話でした。じゃあ中国の企業がアフリカのほうで何をやっているのかと見ましたら、当時、最初のところは交換機でしたが、そのうちルーターになって、それをとにかくアフリカじゅうに売っているのですよ。

私から見ますと韓国と日本との違いは、要するに日本はやろうとしない。社長の話によると、行っても、コストが高いからそんな安いものをつくれないし、やれないんだというような言い方をしていました。でも、高ければ安いところでつくればいいわけで、世界の企業でコストが高いからなんて言っている企業はどこにもいないわけですよ。だけれど日本のトップの方は、高いから、行っても売れないから、もう行かんのだと言って、今まで世界じゅうに張りめぐらしていたネットワークを全部、私がいた8年間の間に、あれよあれよという間にウイズドロー (withdraw; 引退) して、せっかく築き上げたものをリストラということで引き揚げてしまったというのが通信メーカーの現状でした。

ところが現地の話を知ると、向こうの人は私にいつもこういうことを言うのです。「私はNECのあそこで研修を受けたんだ」とか、「KDDのあそこで研修を受けた」「JICAのあそこで研修を受けた」と。いまだに「ニュースリリース」とかそういうの送ってきてくれている。どうして日本が来てくれないんだ。日本がつくったこのパラボラアンテナは今、もう30年たっているんだけど、全然壊れない。日本の商品はいい。だけれど、自由化になって競争し始めた。そうすると、高い製品は買えない。競争入札をすると、安いやつを買わざるを得ない。さらに、技術が進歩しているから数年ぐらいもつようなもので十分になってきた。だけれど、日本の製品はすばらしい。テNDER (tender: 入札) をかけたときには何とか日本の企業が来てほしいのだと。こういうのが現地の人たちの話なんですね。ところが裏返しに日本の企業側から言うと、そんな安いものをつくれない、我がほうは高品質、高価格だとなっちゃっていて、そしてご承知の地球局なんかは、ある時期はほとんど100%に近いぐらい日本のシェアだったのですが、帰国したときにNECだとか三菱に聞いてみたら、もう造っていないと言うのです。100%シェアだったような得意の商品を、全然売れないから、もう止めましたと言っている

のが実情でした。

何でそんなことになってしまったのかということをおなりに考えますと、電気通信産業というのは世界じゅうが、国家独占から自由競争の世界に入った。日本はヨーロッパよりも10年先にやったわけです。日本が1番にやって、その10年後にヨーロッパ、それから10年後に世界じゅうが全部、自由化した。だから日本はもう20年先に自由化して、日本の状況を変えているのですが、ところが肝心なことが変わっていない。今、変わりつつあるのですが、変わっていない。それは何かというと、あまりにもNTTを中心とした技術開発体制、サービス開発体制がすばらしかったために、キャリア主導でやるやり方がすばらしかったために、メーカーが全くリスクをとらない体質になってしまっている。自分でリスクをとらなくて電電公社の言うことを聞く、そうやっていけばうまくいく、そういう仕組みになっている。ところが、その肝心の電電公社がNTTになって競争になって、NTTのほうもそんなに力をかけられなくなって、いわゆる親分がこけた。こけたと言っては恐縮ですがそういう状況になってきているわけです。なのにメーカーのほうはいまだにパラダイムシフト (paradigm shift; 枠組みの変動、価値観の移動) が出来ていなくて、打って出られない。実はこれは日本だけじゃないんですね。ご承知のジーマンスだとか、それからAT&Tから出てきたルーセントだとか、みんな同じ状況なんです。同じような環境の中にあっただのですけれども幸いにしてヨーロッパのアルカテルとかは多少元気がいいのですが、ご承知のとおりルーセントはもうつぶれてアルカテルと一緒になくなってしまって、ジーマンスももう通信のところはおかしくなってしまうている。だからこれはなにも日本だけじゃないのですけれども、要するに親がこけたときに、それをいち早く認識して行動様式を変えることが出来なかったわけです。

日本の場合もう1つあるのは、国民感情といいますか社会慣習というものの自身がまたそれを助長している。冒頭に申し上げました全く横並び、考えな

い人間になってしまっている、そういう日本じゅうにある慣行がさらに体質改善を出来なくしている。ご専門の皆さんにこんなことを申し上げるのは大変恐縮ですけど、私が事務総長になったとき、知らない会社がいっぱいあったのですが、その中の1つがシスコでした。日本にいるときはシスコという名前を全然知らなかった。ITUに行ったら、シスコという会社があって、聞いてみたら10年前に出来た会社だということです。このシスコがITUへやって来て、ITUの開発部門とか、自分が金は全部出すからITUの名前を使って研修をやりたいと。ITUは金がありませんから、それは有難いことですということでシスコに頼んで、シスコアカデミーとかいうのを世界じゅうにいっぱいつくって、そしてシスコが教育して、もうこの情報通信の世界ではシスコ様、シスコ様と、そういう状況になった。だからこのシスコは、ITUに来たときは10年前で、今はもう20年たったのですが、その売上高はNECとほぼ同じ。NECは100年ぐらい続いている会社ですよ。

サムソンについては、恐らく皆様方の中には、サムソンなんかと思っている方もおられるでしょうが、調べてみたら10兆円の売上げですよ。NECの2倍を超していると、こういう状況でした。

もう1つ例を言いますと、その韓国の釜山で行われたITUのアジアテレコムから、私はパリ経由でジュネーブへ帰りました。そのとき、隣にでかい西洋人が座ったのですね。最初は両方とも黙っていたのですが、そのうち話をするようになってみたら、この人間はブラジルのサムソンの支社長だったのです。それで「おれはITUの事務総局長だ」「あ、そうか」とかいう感じで話が弾んだのですが、「何しに来たんだ。ITUの展示に来たのか」と聞いたら「全然違う。サムソンの会社と打ち合わせに来て、もう毎月来ているんだ」と。当然ブラジル人だとばかり思って聞いていました。そしたら何と、後で分かったのですが、その人はスイス人だったのです。サムソンはスイス人を使ってブラジルで商売をやっている。ブラジルには日本のメーカー



も出ていって一生懸命やっていましたよね。だけれどそのスイス人が言ったのは「日本はすべてのチャンスを失った。ブラジルの中にいっぱいチャンスがあったけれども、全然何もやらないから」と。それで、今はもうサムソンが全部やっている。「じゃあ、これから日本がいけるか」と聞きましたら、「それは全然駄目だろう。もう全部ここは押さえているから、ブラジルに関する限りは日本はもう再起不能じゃないか」と。彼が言っているのが本当かどうかは分かりませんが、残念ながらそう言われました。

### ◎韓国の状況

日本側の話を今申しましたが、じゃあ韓国側はどうしてそんなに元気が出ているのか。話が横道に逸れて恐縮ですが、ジュネーブにいる間、本を読んだりテレビを見たりする時間もほとんどなかったのですけれども、それでも2つだけ、ものすごくおもしろくて熱中したのがありました。1つは「チャングムの誓い」という韓国ドラマを非常におもしろく見ました。もう1つは『ダヴィンチ・コード』。これは当時は英語のものしかなくて、小さい字で厚いものを1週間かかって読んだものだから目が悪くなってしまった。ごらんになられていない方もおられるかもしれませんが、「チャングムの誓い」がなぜおもしろかったかという、15世紀の韓国の話ですが、チェ一族という悪いのがいて、それとチャングムが戦う。このチェ一族の悪さが、ヨーロッパの世界の悪さのレベルと同じなんです。だから、彼らがやっていることを、これはジュネーブで起きていることと全く同じだと思います。韓国大使に「おい、チャングムを見ているか」と聞いたら「見ていない」と言うから、「あんたバカだなあ。あんたところの国のドラマじゃないか。これを見たら、あんたがジュネーブでどうしたらいいか、すぐ分かるよ」と言ったら、「それなら私も見ます」とか言っていましたが。[笑] それぐらい悪さのレベルが国際スタンダードだった。[笑] それで考えてみれば、15世紀に韓国は大国に囲まれて大変なことが起きたのだけれども、ずっと生き延びていった。だか

ら、韓国人というのはものすごく国際化した人間なんですよ。

もう30年も前になりますけれども、あるとき、韓国の東京駐在員が単身赴任していた。なぜ単身赴任しているんだという話で、日本へ子供を連れて来ると学校の勉強が遅れて大変なことになるので彼らは日本へ連れて来られない。特に日本は数学のレベルが低くてだめなんだという話を聞いたことがある。30年前はそういうことはだれも知らない時代だけだけれども、今は韓国がどれだけ英才教育をやっているかというのは皆さんもうご承知のとおりです。天才を育てるためにすごい競争をしている。そして例えばサムソンだって、40歳ぐらいで部長になったら、もうあとは、おまえは使えないから辞めろという話ですよ。それぐらい若いうちにダーッと働いて、エネルギーを消耗してやっています。

たまたま郵政大臣はサムソンから来ていましたけれど、サムソンのトップ、何人かアメリカとかフランスなどから来ている人もいますが、皆さんPh.D. (博士号) を持った方で、日本のトップと会わせたら、相手は英語でベラベラと見識の高いことを言っている、こっちのほうは通訳を使ってムニャムニャ言っている、何を言っているのか分からないというのが韓国と日本のトップ同士が会ったときの状況ですよ。それぐらい、トップに優秀な人がいて、ぱっと判断してぱっと動く。一方、日本のほうは個々の人たちはみんなハイレベルの学歴で優秀なんですけど、みんな自分の能力を発揮せずに横ばかり見て、みんなの意見が合致しない限りはトップも決断をしない。いいトップというのは何かというと、みんなに乘せられて動くのがいいトップだと考えている。私なんかは役所で乘せられなかったものだから、外国へ追い出されてしまったと、こういう社会ですよ。

そしてもう1つ、私が韓国人のどの人に会っても思ったのは、激しく絶対に日本には負けたくないという、この怨念を持ってやっています。日本人は、アメリカに負けただけれど絶対にアメリカに負けずに勝ってやろうという気持

ちがまだ残っているのかといったら、全然ないと思うのです。だけれど韓国人はそういう国際化した社会の中で生きてきて、そういうのがDNAに入っているのでしょうか。もっと言いますと、韓国の人に聞きましたら、いろんなバトルがあつて 500 回も外国と戦争した。そして、全部負けた。だけれど、世界中でまだ国が残っているのは韓国だけだそうです。[笑] だからよっぽどしぶとく、すごいんですよ、彼らは。韓国に行ってみれば分かりますが、全く日本と同じ文化で、山の形まで似ていますよ。言葉だって同じ。私は韓国語は全然習ったこともないのですが、5 分間練習して韓国語でスピーチをやったらみんなびっくりしました。言葉を変えるだけで、もう韓国語がしゃべれるわけです。そういうふうに日本と韓国は大部分のDNAは同じだが、1 つだけ、国際化していないというのが日本のDNAが韓国と違うところでした。

#### ◎対応をどうするか

そういうことを考えますと、回答は非常にはっきりしている。まず、世界で売れる商品売らない限りどうしようもない。携帯のところで売れる商品は何かといえば、今、世界じゅうではもうみんなGSMを使っている。まさに3Gだ、4Gだと言っているITUの事務総局長の私も、帰国する直前まで3Gを使わなかったし、そもそもありませんでした。だけれど最後になって、「最後に自分のわがままを聞いてくれ。事務総長が3Gを使わなくてどうするんだ」と言ったら、やっとITUの中で私のために3Gを用意してくれました。というのが現実なんです。だから、例えば携帯電話を外国で売ろうとすれば、GSMがついていないともう絶対に売れない。だけれど日本の企業にお聞きすると、「そんなの出来ません。だから今度、新しいものが出る時、そのときがチャンスだから、そのチャンスのときに生かしてやります」と言われるのだけれど、そのときはもう遅すぎると、私はそういう気がします。だから、とにかく売れるもの、何とかして売るというハングリー精神が

ない限りだめでしょう。

そして、1社でもいいから本当にリスク（冒険）をとる会社があれば、国を挙げて支援する。またちょっと話が横道に逸れますが、今、私はトヨタでお世話になっていて、トヨタは今度は世界一の販売台数になるとか言っている、何でかなと。ちょっと大きい声では言えませんが、トヨタにすごい世界戦略があるようにも見えないですね。[笑] だけれどいろいろ見ていると、とにかく、だれが何を言おうが、いい品質の車をつくらうと思っている。何も新しいものをつくる必要はない。トヨタに技術がないわけじゃないですが、飛び抜けた技術があるようなものをつくらなくていい。要するに、絶対に故障しなくて、お客様に安心して乗ってもらえるものをつくるんだと、それだけ考えている。その戦略だけはすごくあるのですね。そしたら自然に売れて、生産出来ないものだから現地工場をつくっている。今、1年間に2つ、時には3つ工場をつくっているのですよ。工場と云って何千人もいて製品をつくるのは大変なことなんです、それをやらざるを得ない。工場をつくったら教育とかなんかをいろいろしなきゃいけない。だけれどそのポイントは、やっぱり売れるものをつくるだけだということです。

そこで、じゃあ日本の電気通信も売れるものをつくれれば売れるのかなと思ったのですが、ちょっと違うのです。車の場合はネットワークじゃないですから、ある程度のルールにさえ従っていれば、いい車を選べるわけです。ところが、例えば一番いい例が新幹線の技術だと思うのですけれども、私もヨーロッパで何度も新幹線にりましたが、故障ばかりでとんでもない、まともに新幹線が走ったのは何回か乗ったうちの1回ぐらいしかない。あるときは新幹線の中で火事があったのです。クリスマスの日なんです、ジュラ（スイスの北西に広がりフランスとの国境にあたるジュラ山脈）の山中で真夜中に10時間ぐらいとまったまま、最後にとうとう消防車に来てもらって消したという、そんなのがしょっちゅうですよ。だから日本の新幹線の技術は世界

トップなんですけど、全然売れない。やっと台湾かどこかで売れるという話です。これはなぜかという、携帯も同じですがネットワーク商品でシステムですから、よければ売れるのじゃなくて、採用する意思決定をする人か権力か、そういうプロセスがある。だから、製品がいいだけでは売れるものではない。製品がよければ売れるものはデジタルカメラとか車。そういうものは日本の製品がやっぱり世界制覇しているわけです。だけれど、いいものをつくるだけではだめで、国を挙げて政治力を使って支援することが必要な商品もある。

情報化社会になりますと、情報化社会というのはもちろんネットワークですから、ネットワーク社会になればなるほど単品で売れるというものでなくなってきたわけなんです。だから、ますますそういう政治力が必要になってくる。その政治力が必要になってくるときに日本の政府が言うことは、「オールジャパンなら何かやるけれども、そうでなければ一切やらない。大使が何か1社の支援をするなんてとんでもない」、こういう話になる。こんなことを言っていると、全然やれないということになると思います。今、日本がいろいろやっていることは、私から見ると逆のことばかりじゃないかなと思います。先ほど言いましたように、政府だ、オールジャパンと言った途端に各企業は全くリスクをとらなくなりますよね。御上の言うとおりに、御上の言うとおりでなければやれないと。だから、オールジャパンと言っている限りは絶対うまくいかないと思う。

もう1つ、いつもいつも聞かれるのは、日本発の技術を世界の標準にするにはどうすればいいのですかと。かつてはそういうことが出来たかもしれませんが。特に、一番有名なのはファクスの3G。あれなんかは大成功した例ですが、今はもう、日本発と言った途端にヨーロッパ、アメリカにブロックされてしまって、それは絶対通らないという仕組みになっています。本当にもうそうになっている。その認識が全くない。もちろん日本発の技術が世界標準

になったらいいに決まっているのですが、政府がそんなことを言った途端に、もうその技術はだめになるという世界情勢をまず知る。それを知れば、日本発なんか言わずに共同開発をして実質をとっていくのが基本なんです。そういうことは日本ではほとんど誰も言わない。仲間外れにならないように、仲間と一緒にするには何かというと、地道な話ですがやっぱり留学生だとかをどんどん受け入れ、我々も外国へどんどん行って、本当に人的交流を積み重ねて初めて、日本バッシングといいますか、そういうことを排除出来る、こういう話ではないかと思います。

まとめますと、韓国では何が起きているかということ、極めて強いリーダーシップでものが動く。政治もそうだし、民間企業も、上意下達といいますか、上がとにかく動く社会である。果敢な行動をする。彼らはとにかくリスクをとっている。それから差別化というのは要するに日本の横並びとかそんなのじゃなくて、差別化が基本だ、強いものが勝つのだ、天才を育てるんだと、こういう発想でやっています。日本はどうだろうか。日本では教育改革と言っていますけれど、天才を育てるという言葉は一言も出てこなかったですよ。だけれどイノベーション（技術革新）が何で出来るのかということ、やっぱりごく一部の優秀な人のアイデアで出来る部分が多いわけですから。

欧州では何が起きているかということ、一致団結して欧州の標準化でもってバリア（barrier;防壁）をつくっていく。欧州仕様でない限りは使用させない。そして欧州仕様で欧州の中がうまくいくと、次はアフリカ、中東だと、こういう話になっています。これはGSMをごらんになられても明らかです。もう1つ、今ほとんどの方がご存じないのはデジタルテレビジョン。日本では2011年にすべてデジタルテレビジョンになると。デジタル化のためにものすごく景気が回復したと言われる分野もあるぐらいですが、大変な需要だと思ふのです。じゃあ世界でこのデジタル化はどうなっているのか。新聞にはブラジルで日本の技術が採用されたという記事がいろいろ出て、これは結構

なことなんです、デジタルの標準化の技術は、ヨーロッパ、日本、米国方式と3つある。そこまでは皆さんご存じなんです、実は今年のITUの地域無線会議（リージョナル・レディオ・コンファランス）というところで、ヨーロッパ地域、全アフリカ、それから西アジア地域のデジタル化のチャンネルプランをやったわけです。地上のテレビジョン放送の電波の免許の出し方というのは、日本の場合はここからここまでが放送局用ですよというバンドをITUで決めます。そしてその後、放送局の放送プラン（チャンネルプラン）をつくって、総務省がそれに基づいて免許を出すというやり方なんです、今言った地域は実際の免許は各政府が出すのですが、どこの町に何キロワットの放送局をつくるというチャンネルプランまでITUで決めるわけです。ですからITUの会議の最後のドキュメントはもうCD-ROMでしか渡せないという状況でした。ヨーロッパ、アフリカ、西アジアの地域がヨーロッパ方式のデジタル放送に2015年までにすることが決まりました。

これはものすごいビジネスチャンスなので、その会議に、情報収集のために日本からもだれか代表1人ぐらい送り込んだらいいと思ったり言ったりしたのですけれども、だれも来ませんでした。それだけのビジネスチャンスがあって、日本ではそれより早くデジタル化だとやって技術は全部持っているけれども、だれも注目さえしていない。そして今、新聞等に載っているのは何かというと、南米の地域はどの技術を使うかというのはまだ決めていない、それから南米の地域のチャンネルプランは日本と同じようにITUが全部決める仕組みじゃない。そういう南米地域に注目して、日本のデジタル技術をブラジルは採用してくれるだろうか。ところが、その採用してくれるブラジルへ日本のメーカーが飛んで行って「これで」とやるかといったらそうじゃなくて、今、行って「さあ、これで」とやっているのはサムソンなんですよ。サムソンは、日本の技術であろうが、何の技術でやってもいい、デジタル化をやるのなら、そこへどんどん行ってやるよと言って、工場をつくった

り、いろいろし始めています。

話が大変横道に逸れましたが、欧州でどういうことが起きているかという  
と、欧州は標準化でもって世界を制するというのが基本大戦略になっています。  
ですから答えは明らかなんです、日本が欧州に勝てるかということ  
ですね。大欧州が何かをやると、アフリカもそれに従う。そうすると隣の西ア  
ジアもそれに従う仕組みになっている。それ対アメリカと、こういう格好に  
なるわけです。そういうことを見ただけでも、「日本発の標準」とか言ってい  
るのが戦略的にはちょっとずれているということが分かると思うのです。

もう1つ欧州の大きな発想は、マーケットは中国と、これはもう徹底して  
いるのです。標準化でもって世界を制すると同時に、マーケットは中国だ  
から、とにかく中国に行つてやると。ノキアの社長なんか「一体おまえは  
どこで商売しているんだ」と聞いたら、即座に「中国」と返つてきた。世界  
だとかヨーロッパとも全然言わない、中国と。それが彼らの発想です。最近  
はインドということになるのかもしれませんが、少なくとも私がいる間は中  
国でした。

じゃあアメリカは何かというと、はっきり言ってアメリカには戦略がある  
のかなのか、私には分かりません。とにかく自由競争でやればアメリカが  
勝つと、こういう信念がすごくあります。そして1つだけ政府が死にものぐ  
らいで考えているのが、インターネットは絶対にアメリカが独占すると。こ  
のインターネットの独占というのは技術じゃなくて、いわゆるドメインネー  
ム、ルートサーバーの話、ITUで問題にしましたインターネットガバナ  
ンスという問題です。釈迦に説法で大変恐縮ですが、アメリカのセンターで  
ボタンをちょっといじれば日本のインターネットは全部ストップする、インタ  
ーネットというのはそういう仕組みになっているわけです。それを絶対に独  
占するということです。

日本はこういう状況に対してどうかというと、先ほどから申し上げました



ように横並び、ノーリスク、もう1つちょっと言わなかったことに完璧主義があるのですね。世界じゅうのスタンダードは完璧じゃないのですよ。ところが日本はものすごい完璧主義ですから、スピードの面から初戦で負けてしまう。オファーをしろと言ったってオファーが出てこない、何かやろうとしたって日本からは提案も何も出てこない。なぜ出ないかという、必死で完璧なものをつくろうと思うものだから全然出てこないわけです。日本ともものすごくつき合って、日本のいいことを知っている人は、日本に頼んだら完璧にすべて出来るとよく知っているのですが、だけれどよく知っているから日本に頼むよなんていう時代ではもうなくなってきた。なぜならば、どこの世界も競争でテnderにかけて同じ物差しで判断する。個別に日本がすばらしいから日本に頼むという判断が出来るような世界が、だんだん少なくなってきた。このことを世界レベルの状況にしなきゃいけないと私は思います。

いかに日本と外国とが違うかという、分かりやすい一例を言います。例えば日本の場合は毎月、電力メーターをはかって何円だと来る。たまたま電力メーターをはかりに来るときにいなくて戸締りなんかしていたら、「不在、何日にまた来ます」とかあって、そこでまた不在だったらもう一回ぐらい来る。そんなことをやって毎月毎月、正確な料金を支払うのが日本の制度です。スイスのジュネーブの場合はどうかというと、1年に1回だけです。実は、これは私も知らなかった。毎月来ているのかと思っていたら、帰国する前にもものすごく高い金額の請求が来たわけです。それで電話をかけて、フランス語で「これおかしいじゃないか、毎月払っているのに」と言ったら、「それはお宅は毎月ちゃんと払ってくれていますよ。しかし、トータルの使用量を見たら今年はこれだけ使っているでしょう」「そのとおりですね」「実は今年の請求は去年の使用量で請求していますから」と、こういう話で1年に1回だけだということがやっと分かったわけです。ほかにもこんなことばかりです。だから1年に1回でも世の中はうまくいくし、もし1年に1回だったら極め

て効率的な仕事ができるわけです。日本では集金に来るのをやめて振替にするぐらいが効率の仕組みになっているのですけれども、あのスイスですよ、世界で一番精密、厳格な、ちゃんとしているスイスと言われるところでもそんなことですから、日本が今の完璧主義を維持している限りは競争に勝てないと思うのです。

今ちょっと思い出しましたが、1ついい例を申し上げます。先ほどテレコムというのを言いましたけれども、テレコムの展示でメーカーさんがどの場所に自分の展示をやるかという場所取りが一番大事で、その場所取りを何年も前からやるわけなんです。日本の場合は、まずテレコムへ出るのか出ないのか、出るとすればどれぐらいの面積かとか、これを社内でバタバタやるものですから、申込みに来たときにはいい場所はもう全然ないというのが実態です。ところが、日本の企業のある方が知恵を絞って、自分でリスクをとって、いい場所をとっていました。そこの社長がテレコムに来たら、入って一番いいところに自分の企業の展示があって、ご満足なわけですよ。ところが、その方が定年になって辞められた途端に、リスクをとる方がいませんから全然いい場所をとれない。次に社長が来たら隅っこになっているので、「どうなっているんだ」と怒鳴り散らす。正直、こういうのが日本の企業の姿なんです。一方、韓国はみんながリスクをとっていますから、全部、真ん中に韓国の企業がいる。そういう差があるわけです。

#### ◎事前の質問に答えて

極めて雑駁な話で恐縮ですが、一応お話を終わらせていただきます。大方のご質問には今のお話で答えたつもりなんです、お答えしていないご質問の中に1つに「日本が国際社会の中でより存在感を出すためにはどうしたらよいのでしょうか。分担金が払いすぎなのですか、払いすぎでないのでしょうか。分担金の割には人を出していなさすぎるのじゃないのでしょうか」というご質問があります。私は人はあんまり出していないと思いますが、分担金

は十分に出していると思います。むしろ私が一番恥ずかしいのは、国連総会などでの日本の大使のスピーチです。私が何度もそれを聞いて恥ずかしかったのは、「何とかのプロジェクトに何億円拠出します」とか言うんですね。これが一番恥ずかしい。何であんなことを言うのだろうかと思うのですが、それが外務省がつくるスピーチなんです。

日本の存在感がなぜないかというと、口を出さないからです。どんな小さい国、分担金も払っていない国でも、口を出すといいですか、立派なことを言う、あるいは文句をつける。立派なことじゃなくてもいいのです。事務局のおかしいことに文句をつけるとか、よその国の悪いことを批判するとか。大国ですからやっぱりいいことを言わないといけないのですけれども、発言することがないから存在感がないのだと思います。どんな国際会議とか、どんな国際的な政治レベルでも、日本はかつてはバッシング (bashing; 叩くこと) でしたが、今はナッシング (nothing; ゼロ) です。要するに、見えていない、相手にされていない。

またちょっと横道に逸れますが、国連のトップが年に2回集まる会合があるのです。国連事務総長が司会をして、世銀の総裁だとかIMF専務理事、それから我々とか20人ぐらいが集まって世界情勢を語る会なんです、年に2回やります。そこへ参加して会議の状況を知っている日本人は、私を含めて緒方貞子さんなど4人しかいません。そこでは事務総長の世界政治報告と、世銀とIMFが順番で世界経済レポートというのをやるわけです。もう4年前になるかもしれませんが、IMFの専務理事がレポートをした。その人は後でドイツの大統領になりましたけれど、その方が何を言ったかということ、「世界経済の3分の1近くを日本経済が占めているのですよ。日本はまだそうなんだから、日本を忘れちゃいけませんよ」というのが国連のトップの会議のレポートなんです。だから、いかに日本が忘れられているか、だれも見えていないということがお分かりになると思うのです。ですから、とにかく発

言しなきゃいかんと強く言いたい。

そしてもう1つ、「豊かな社会であるための条件は何だと考えますか」というご質問です。私は、豊かな社会というのは個人主義になれる社会だと思うのです。要するに自分自身で自分のことを考えられ、自分に合ったことが出来る社会だとおもいます。日本ではよく、西洋人は個人主義でだめだとか言うけれども、個人主義と利己主義とは全然違いますよね。一番豊かな社会というのはどこかなと思うと、フランスとか北欧ではないか。経済的にもそれは必要でしょうけれども、やっぱり1人ひとり、自分自身が好きなことが出来るような社会が豊かな社会ではないか。日本人の場合は、好きなことすら分からない。私がスイスから帰ってきてみると、自分が好きなことは一体なんだろうかということが分からないぐらい日本は不幸な社会になっている、そういうふうに見えます。マスコミ等のどんな点に問題があるとお考えですか」というご質問に答えますと、私はやっぱり教育、マスコミですね。政治とか行政とかいうのはその結果ですから。要するにヨーロッパ社会と比較してみると、みんな個人が何も考えない、横並びだけ。そして、だれかが何か言ったことだけを気にして、政治も行政もすべてが動いている。たまたま放送行政に少し関与していたことがあるのですが、帰国していろいろおもしろくないことの1つに、NHKのレベルがガクッと落ちてしまった。これは恐らく不払い運動とかの結果、NHKが極めて迎合的になって品質のいい作品をつくらなくなっている。世界じゅうで一番いい放送番組をつくっているところは、BBCとかフランスの国営放送とかそういうところになるのですが、彼らは何をしているかということ、NHKみたいに視聴率に迎合はしなくて、とにかく考えて自分がいいと思うものをつくる。そういうことをマスコミがやってくれないと、マスコミが何かに迎合してくだらないことばかりを出すものだから、今の政治のていたらくはアホらしくて見ておれない状況になっているということだと思えます。

そして「日本が国際舞台のどのような分野で、どのような貢献を行っていくべきという考えですか」というご質問。私は貢献という前に、日本はみんなの仲間にならせてもらう。例えばITUの選挙でも、大抵の方は、アジアは全部日本の候補に入れてくれるだろうかと、私が立候補したときもみんなそう言いました。そしてすぐに、アメリカがどんなサポートをしているのかと聞かれるのです。私はいつも「たまたま私にはいろいろな仲間がいるから投票してくれるかもしれないけれども、アジアは日本には投票しない。アメリカが日本をサポートと言った途端に、日本に投票しなくなりますよ」と。それが世界なんですよ。そういう状況が日本の人は全然分かっていませんから、アジアは日本をサポートしてくれる、アメリカのサポートを受けなきゃ当選しないと思っている。全く逆なんですね。

それでご質問にお答えしますと、やっぱり日本人が謙虚になって、中国人とか韓国人に愛され、世界の人たちと仲よくして世界の中の一員に入れてもらう、そういう発想がないといけないのじゃないかなという気がします。8年間いる中で、私は一番トップなんだけれども、日本人であるがゆえに常にのけ者でした。何人かは一生懸命に私をサポートしてくれる人がいたり、心を許せる人はいましたけれども、私個人ではなくていわゆる日本ということでは、本当に孤立しているのです。アジアから嫌われ、ヨーロッパ、アメリカからは全然仲間じゃないと、そういう日本ということ考えた場合は、まずはアジアから好かれるようになることがすべてである。アジアに好かれ、その次はヨーロッパ、アメリカと対等になれるように。対等になるためにはアジアのサポートがないとなれない。対等になって初めて、連中も日本とつき合ってくれる。すべてのことについて、そういう位置づけでした。

大体そんなことで、ご質問には回答したつもりでございます。

[質疑応答]

[司会] どうも先生、有難うございました。ジュネーブでの数々の貴重なご体験等を交えまして、世界と日本の大きなギャップというものを、お話を聞いてまた痛感したところがございます。ではご質問がありましたら、挙手をされてご質問いただきたいと思います。

[問] 海外で活躍する日本人もたくさんふえておりますけれども、さっき一番欠けているものが日本の教育ですとおっしゃいました。それらを直していくために我々が一緒になって協力するとしたら、どういう分野で具体的に日本の教育を直していくかというところを、もしできますればご意見を拝聴したいと思います。

[答] 具体的にどうしたらいいのかというのはなかなか難しいのですが、たまたま私は8年間も向こうにいて、そういう事例ばかりを見てきた。そして自分自身もうまくやれなかったというので、7年目に大体これで国際社会がどんなものかというのが分かってきたなという気がしたのです。それで本を書きました。本を書いたのですが、自分でその題名を忘れちゃって。[笑] 『勝つための国際交渉力』とつけたのでしたね。日刊工業新聞から出しまして、残念ながら日刊工業新聞というのは宣伝してくれないところだから本屋にはほとんど置いてないので、アマゾンなんかで買っていただければと思います。

私とその本を何で書いたかという、ベテランも含めて若い人たちが、外国人というか国際人と接触するとき、基本的な過ちをいっぱいやっているのですね。それを早く教えてあげたい。知っていてもなかなか行動出来ないのだけれども、知らないよりは知っていたほうがまだいい。即席で出来るよというということで非常に簡単に記述してノウハウものの本にまとめたので、ご関心のある方はぜひ読んでいただきたいと思います。

そこには何を書きたかったかという、冒頭のほうで申し上げましたが、

要するにお人よしになるな、相手は全然そんなのじゃないんですよと。私も非常に有能な秘書に、何度もしかられました。おまえは相手が自分と同じ性善の人間だと思ってつき合っているけれども、相手は全くの性悪者なんだから、そんなことをしてはいかんと。それが出来ないのですね。そしてだんだん分かったのは、性悪説で育った人はいとも簡単に性善説で振る舞える。ところが性善説で育った人が性悪人間で振る舞おうと思うと、こんな難しいことはないのですよ。[笑] 日本という社会は、どんな性悪の人でも日本人である以上は性善なんですよね。だから、性悪になれない。それで7年目のときに、とにかく若い人に教えてあげなきゃいかんと思って、寝る時間を惜しんで書いたのです。ところが、それから1年たって私の後任を決める選挙のプロセス、それから政権交代した後の状況を見て、私が書いたことは全く甘っちょろかった、これよりもよっぽど悪い世界だということが分かったわけです。だから、早く改訂版を出さなきゃいけない。[笑]

この間、ITU協会のセミナーで、全員読め、読んでから私の話を聞けと言って読ませて、そして話をすると、質問第1号が「あの本を読みましたが、ここに書いてあることは大げさに書いているのじゃないですか」と言われたわけです。だから「いや、とんでもない。大げさじゃないんだ。これでもまだ甘っちょろかったと思っているんですよ」という説明をしなきゃいけないぐらい、本当に組織の中にどっぷり浸かっていました。

外国にたくさんの日本人が出ていますけれども、見ていて本当に現地化して現地の中で取り組んでいたり、あるいは対等に交渉を出来ている方は、1人もいないと言ったらうそですが、ほとんどいませんね。帰国したときはうまくやったような報告がされ、失敗したことは全部隠されています。企業によっては非常に国際通がトップになっている企業もありますけれども、通信の世界というのはまた別ですから全然知らない。そういう状況が現実です。

だからご質問には私はすごく共鳴するのですが、じゃあそれをどうして解

決したらいいのかということになると、それが私の1つの任務で、こんな話を方々でやらせてもらって、とにかく世の中そんな甘っちょろいことではありませんよと。あの凄腕だと言われている民主党の小沢一郎さん、今、政界から恐れられていると思いますが、アメリカにポイと何の議論もなく湾岸戦争に金を払ってきたわけでしょう。それがやっぱり日本人なんです。世界ではそんなことをする人、あるいはする国はどこにもないです。それをするときにはいろんな条件を出して、ネゴシエーションをした結果でやるのが世界常識ですが、日本人では小沢一郎ですらああいうことなんです。それが日本の常識、あるいは日本全体が置かれている立場だから、そういうことにならざるを得ないのだと思うのです。

だから、みんなで現状を認識して変えていかなきゃいけない。そのことを担うのは、やっぱりマスコミですね。マスコミの担う役割は非常に大事だと思う。日経新聞に出た私についての記事を書ってくれた記者さんというのは、たまたま一緒にジュネーブにいた人なんです。だから、記者さんはよく分かっているからこんな記事が書けたのです。マスコミの方でもこういう記事が書けますから、そういう地道な活動だと思います。

もう1つ言いたいのは、日本人はみんなそうだったのかということなんです。日本人も過去は違う。戦国時代もそうだし、倭寇として攻めていったときもあった。それから戦前も、国連を蹴って脱退してきたわけでしょう。それがよかったかどうかは別として、そういうことが出来た。それから軍艦の5・5・3とか、そんな割合はけしからんと日本人も燃えた。また話は飛びますが、おもしろかったけれど読んで腹が立った本が『国家の品格』。今、日本人が非常に自虐的になって自信喪失ですから、あの本は日本人はすばらしいと自信を与える意味では非常にいい本ですし、私も気持ちよく読めました。ナショナリズムを高揚するという意味では非常に功績がありましたが、どうしてもけしからんと思ったのは、日本人はすばらしいから、これでやれば世



界で勝てるのだというところですよ。そんなことを世界でやったらとてもじゃない。極端なところを拾うと、例えば国語だけをやっておけばいいのだと。それは国語はやっておかなきゃいけないけれども、英語もしゃべれない限りは絶対に出来ない。あの本は、品格があれば勝つと書いているわけです。品格は必要ですが、品格だけでは勝てないということが全然書いていない。副大統領が英語も知らなかったなんて、そんなのはうそ八百ですよ。連中のトップレベルの人というのはすばらしい力を持っています。我々では全然かなわないレベルを持っているのに、何か外人はとんでもないというようなことを書いたりしている。そういうところは本当に許せない。

かつては日本人もやれたんですよ。30年前まではアフリカの隅々まで商社の人たちが行っていた。ところが、20年前に国際会議なんかに行きますと、日本人だと思って会ったらみんな韓国人でした。その20数年前ぐらいから、日本人がガタガタガタとおかしくなってきたと思うのです。何でおかしくなったのかというのはよく分かりませんが、マスコミも1つの原因だと思うのですが、地道なことをやって早く現状を認識することが一番かなと。現状認識さえすれば、日本人はやれるパワーがあるという気がいたします。

〔問〕ITUとかWSIS (World Summit on the Information Society; 世界情報社会サミット) とか、こういったところのボランティアの役割も大事だと思うのですが、日本人で国際的なボランティア活動をしている方は非常に少ないですね。こういったところも含めて、ボランティアが海外できっちりと活躍出来るすそ野を広げることが大事だと思うのですが、そういうことを促進するために何かいいお考えはございますでしょうか。

〔答〕すごくいいご質問だと思います。私がジュネーブで見えていて日本と全く違う判断をしたのは、北海道の女性で、イラクで人質になった方がおられましたね。みんなが心配して幸いにして救出されて、第一声が「またイラク

に來たい。イラク、アラブでは女性を大事にしてくれた。ストリートの子供たちのことを考えたら、またイラクに来てやらなきゃいかんと思っている」と言ったわけです。そうすると日本ではバッシングが起きて、けしからんとかいう話になって、それ以後、彼女は沈黙をして、今は何をされているのか分かりません。

だけれど、彼女がそういう発言をしたので外国のメディアは、日本人は素晴らしいと書いてくれたのですよ。日本ではとんでもない恥知らずの女となっちゃったわけです。私は、何でこんなに日本人というのは分かっちゃいないのかなと思いました。彼女は世界では英雄なんです。私も本当に素晴らしいと思いました。アラビア語は日本人からすると一番難しい言葉ですよ。そういうところで、しかも女性差別がすごい世界に行って、ストリートチルドレンの面倒を見ていたわけでしょう。日本というのは了見が狭いといえますか、国内だけになっている。そういうことが起きているときに、NGOやボランティアの方々の行動を評価する基盤が日本にはないのですね。大半のボランティアの方は多かれ少なかれ、この女性と同じようなレベルで動いている方が多くて、金銭的な利益を目標にしているのではなくて、人のため、世の中のためにやっておられる。私も何人か知っています。日本は、それを受け入れられる社会ではなくなってきている。

私は若いころから、生きがいとは何なのかということに少し興味を持って、そういう記事が出るとよく注意していたのですが、戦前の日本人の青少年の生きがいというのは「清く正しく、国のため社会のため」ということで、「自分自身のため」というのはほとんどいない。私が役所へ入った昭和41年の直前の調査だと、戦前とは違ってかなり「自分自身のため、楽しむために生きる」とかいうようなことがあって、でも半分ぐらいは「世の中のため、人のため」というのが生きがいだという感じでした。今や日本人の青少年の意識調査では、「人のため、世の中のため」なんて言っている人はもうゼロに近い

状況になっているのです。この前どこかで講演してくれというので、そのことをお話ししたいなと思って、データが欲しいからインターネットで「生きがい」と引いてみたのです。そしたら出てきたのが全部、「年寄りの生きがい」「年寄りの生きがい」と。[笑] だから、日本の社会は青少年の生きがいが何であるべきかなんていうことに注目さえようになってきている、プラス生きがいを持っていない年寄りがいっぱいいる、こういうのが日本の社会になっている。それで先ほどの回答になるのか、これはコメントですけども、西洋では半分以上が生きがいは「世の中、人のため」となっているのです。そういう方々がボランティアだとかNGOなんかをやるのが随分多い。こういう状況を見たときに、何が国家の品格だ、あそこに書いてあるのは何なんだという質問を藤原正彦先生にしたいですね。[笑]

例えば漫画でも何でもいいのですが、世の中のためにやって本当によかったと思うようなストーリーとか、ドラマとか、何で出てこないのかなと。「チャングム」が何でおもしろかったかといったら、先ほど言ったチェ一族の悪さも非常におもしろかったのですが、同時にチャングムが人のために一生懸命にやっているわけです。あれはやっぱり共感するところがあった。美人だから共感したのじゃないのですよ。[笑] 今の「風林火山」はなかなか人のためというような感じじゃないですね。ちょっとスケールが小さい。一方、「チュゴン」というのを見ておられる方はいらっしゃいますか。高句麗建設の歴史ですけど、あれはそのうち「人のため、世のため」になってくるんですよ。だから、韓国のほうがよっぽどすばらしい。

日本の江戸時代の勸善懲悪を言うわけではないのですが、道徳教育のようなものがなくなった。ヨーロッパの社会で何でそれがまだ維持出来ているかというと、やっぱりキリスト教だと思うのです。キリスト教には全然関係のない人がいっぱい出てきていますが、やっぱり小さいときからそういうエシク（ethic;倫理道徳）が植えつけられている。それから韓国だって、キリ

スト教が50%を超しているのです。一方、アラブの人たちだってアラーの神のイスラム教への信仰はものすごい。日本の仏教でもやっぱりそういうことはあったのだけれど、葬式のための仏教だけになってしまって、無神論で、しかも道徳教育みたいなものもなくて、それで人間の根幹の部分が欠落してきている。そういうのがどんどんふえてきたものだから、ここで急速に、元気もない、リスクもとらない人ばかりがいて、何もしないという社会になってきているのかなという気がしないでもないですね。アメリカなんかも、キリスト教はまだまだすごい深いですよ。もちろん凶悪犯人とかいろいろな悪いことはあるけれども、社会トータルとしてはアメリカ社会のほうがよっぽど健全だし、自浄作用がある。日本の場合は自浄作用がすごく薄くなってきているような気がいたします。

[問] 今、私は原子力関係の仕事をやっていて非常に感じるのは、先日の柏崎の事故で日本はまるでチェルノブイリぐらいの悲惨な状況が報道されるとか、政治関係では毎日の新聞は争うかのごとくスキャンダルの報道が多くて、例えば日本としてどうやって財政赤字を改善するかとか、そういう報道がほとんどされていない。こういう中、社会の一員として我々自身も変わらなくちゃならないと思うのですが、一体どうやったらそういうのをもっと前向きな、聞いて明るくなるような雰囲気につくれるのかなと。その辺、何かお考えがございましたら教えていただけたらと思います。

[答] 現状を分析する、何でこんなことになっているかというのを分析するのは可能なんです、どうやったら改善出来るのかという答えが今、ないんですね。

現状の分析をちょっとさせていただきます。私は放送行政をやりましたが、日本の放送局ぐらい自由な放送局というのは世界に皆無です。日本の放送というのは、放送法というのがありまして、公平でなきゃいかんとかいろいろ

書いてあるのですが、それをたやす方法は無いのです。ただ唯一あるのは、電波免許を剥奪して、電波をとめてしまえる。それは放送局が死んでしまうことですが、それだけしか出来ないのですね。ところが、世界中の放送局の大半は国営です。要するに、国が放送している。ヨーロッパだとかアメリカというのは独立委員会があって、そこが番組をチェック出来る仕組みになっていて、改善させられる。ですから、番組の改善もさせられない国は日本だけ。1つぐらい例外があるかもしれませんが、それが日本なんです。なぜそう出来たかという、戦後すぐに出来た放送三法による仕組みがあるからです。戦後すぐの状況の中で出来た法律です。

じゃあ、スイスはどうなっているのか。スイスは直接民主主義といって、場合によっては小さい村ではタウンミーティング (town meeting; 対話集会) がありますし、レファレンダム (referendum; 住民投票) だといって、しょっちゅう、いろんなことについて国民投票で決める、そういう民主主義の手本になっているような国です。ある日ジュネーブ空港へ行きましたら飛行機が飛ばない。何でだと聞いたら、「今、ハイジャックだ」と言うのです。でも、そのハイジャックが起きて飛行場がストップしているのをテレビで放送されるわけでもなく、新聞に出たわけでもない。日本だとハイジャックだったらもう大騒ぎで、朝から晩までそればかり放送しているのが、スイスではジュネーブ空港がハイジャックされたというのはちょっとまずいから、そんなのは放送しないと、こういうことになっているのです。[笑]

それから、スイスは国民皆兵だから、みんな家に鉄砲があるわけです。それで年に何回かは日曜日ごとに、フランス語ではティラージュと言うのですけれど、射撃の練習をしなきゃいけない義務がある。ですから昔、スイスにいたときは田舎のほうに住んでいて、近くにティラージュの射撃場があって、土曜日・日曜日ごとにうちの家の前をみんな鉄砲を担いでバイクで行っているわけです。それほど鉄砲がいっぱいありますから、これは恐らく鉄砲によ

る事故、犯罪というのは幾らでもあると思うのです。だけれど一切、報道ゼロ。民主主義の大手本のスイスですが、その辺がマスコミなんですよ。

さらに、私が「愚妻は」と言ったり、「うちの家内は全くだめで」とか「息子がちょっとだめで」とかいう話をすると家内が怒るのです。なぜ怒るかという、ヨーロッパでそんなことを言っている人はだれもいない、それを言った途端にみんなから笑われ、「あんたのご主人どうかしているのじゃないの」といつも言われるんだというわけです。要するに、家族だとか自分の近辺の悪いことは絶対言わない、みんな褒めるわけですね。なぜスイスがEUに入らないかという、EUに入ったらEUのスタンダードに従わなければならないからです。

それに比較して日本は先ほどご質問あったとおり、悪いことだけを報道する。本当に悪いことだけを報道して、いいことを報道している番組とか記事はほとんどないですよ。そうすると世界じゅうの人は、日本というのは気が狂った国じゃないかと思うわけです。総理大臣なんかも、あまりものを言わない、何を言っているのか分からない。8年間スイスにいる間に国際社会から評価された総理は、私が知る限りは小泉総理だけ。なぜかという、あの人が言うことは分かるというのです。分かる人が出てきた、あれなら改革するぞと世界の人みんな評価しました。

じゃあ、そういうマスコミをどうすればいいのか。ヨーロッパとかほかの国で起きることは不買運動です。そんな嫌なマスコミなら、買わなきゃいいんですよ。ヨーロッパでは日本の朝日新聞なんかは衛星で来るものだから、1日600円くらい払わなきゃいけない。最初は買っていたのだけれど、1週間くらい買っているうちにアホらしくて読めなくなってきた、全然買いませんでした。8年間、新聞は読まなかった。例えばフランクフルト空港とかパリ空港へ行くと、日本の新聞も置いてある。そのときに2日かけて全ページを細かく読んだら、リカバリー（recovery; 挽回）ですね。[笑] 外国ではく

だらない新聞は全然買われなくて、第一、何千万部ですか、そんな新聞は世界じゅうにないのですよ。なぜ日本人は同じ朝日と読売と日経しか読まないのか。産経なんかいいことを書いてあるときがあるのだけれど、産経を読んでいるとみんなが「何で産経読むんだ」というような感じになっていますよね。[笑] だからマスコミだけが悪いのじゃなくて、国民全体が悪いからあんなマスコミをつくっていると云えますね。マスコミだけ、教育者だけによくなってくれと言うのも難しい。そうするとやっぱり『国家の品格』みたいな、ああいうベストセラーにうまく書いてもらって意見を浸透させるとか、何かそんな方法でもあるのかなと思って一生懸命に『勝つための国際交渉力』というのを書いたのだけれども、本屋で出してくれないんですよ。

[笑] ちょっと困っているんですよ。

[問] 総務省は、例えばアメリカのインターネットの独占化に日本のどういう通信制度をぶつけようとしているのか、していないのか、それも含めてでございますが、NTTグループに対して行政との連携も要るのか要らないのか、そのあたりを簡単にでもいいですから骨子だけでもお聞かせ願えればと思います。

[答] 私は、今おっしゃったとおり通信の自由化を進めた張本人です。それより前に国がとった政策というのは、NTTの独占を擁護する政策を全部とっていたわけです。若い方をご承知ないかもしれませんが、昭和30年ぐらいですが、有線放送電話とNTTの電話の加入が同じぐらいの時代だった。それぐらい有線放送電話は伸びてきたのだけれども、それも全部つぶしてNTTを保護して1つのいいネットワークをつくる政策をとっていた。そして昭和45～46年ごろに、そのネットワークが完成したのですよ、そこまでは私は、独占が一番いい政策だったと思います。今でも開発途上国の人はそのことを言っている。しかし、ネットワークが完成してからは独占の弊害が出て

くるようになった。独占の弊害を排除するためには競争を入れなきゃいかんということですね。それで一生懸命に、とにかくNTTを敵に回し、NTTだけが敵ではなくて通産省まで敵になったものだから大変な状況になって、私はNTTとのけんかよりも、むしろ通産とのけんかのほうばかりを担当したのですが、電電改革が出来ました。

ところが、今の状況はまるっきり違うのですね。日本はもう大変な競争状態になっています。全く過当競争ですよ。ここからやらなきゃいかんことは何かというと、日本がどうやって生きていくかということなんですね。10年ぐらい前はまだ日本はちゃんと生きていたわけですが、今やちょっとアジアの国に行けば分かりますけれども、シンガポールとか香港あたりに行くとな女性がみんな日本より美人に見えるわけですよ。なぜかというと、ハイカラな服を着ているから。ファッションでさえも向こうがリードするぐらい彼らは力を得て、ビルなんかを見たってどこへ行ってもすごいのがいっぱい建っている。そういう状況になってきたときに日本がどうやってこの生活レベル、経済レベルを維持するのかというと、工場生産で彼らと競争出来るわけがないのですから、日本はやっぱり頭脳で競争する以外にない。要するにハイテクで、日本は常に彼らよりも1歩でも2歩でも技術が進んでいなきゃいかん。そういうことで競争する以外に、日本の経済力を維持する方法はないと私は確信しています。

そういうハイテクの分野はどこなのかというと、情報通信、エレクトロニクス、バイオ、省エネ、それと自動車も入るのかもしれませんが。そういう中の情報通信分野はものすごく大きな位置を占めますし、情報通信技術はそれだけじゃなくて全産業の基盤になるところですから、そういうことを考えるとさらにもっと重要な位置を占めるわけです。そのの、まさに競争力というよりも技術力を維持する、競争する。だから、競争政策は国民競争政策ではなくて、国際競争政策をとらなければいけないですね。国際で勝つためには



どうすればいいのかというのは国が考えなきゃいけないことなんです。国内の競争は、仕組みさえつくれば勝手にやらせておけばいい。そして15年前に、もう仕組みは出来たのです。だから日本の国が今やらなきゃいけないのは、国際競争力をつけるのにどうするのか。

そのときに考えるのは、なぜ日本のエレクトロニクス産業、特に情報通信は、アメリカに負けずに、もっと分かりやすい例で言うとIBMに負けずにコンピュータ産業を維持出来たのかという質問ですよ。一生懸命にみんなが働き、通産省がいい施策をとって大型プロジェクトをつくったとか、そういうのが政府としては正式の回答かもしれません。だけれど私はNTTを見ていましたし、データ通信の担当もやっています、NTTが電子交換機を開発し、さらにDIPS-11のコンピュータを開発していったプロセスを知っているのですけれども、すごい資金と人材とチームといますか、このプロジェクトのマネジメントといますか、英語で言うとリソースが投入されて、そのおかげで日本のエレクトロニクス産業は成り立った、負けずにきた。それが今の国際競争力の源泉になっているのです。それと同時に、最初に言いましたようにそれが今、国際競争力を削いでいる原因になっているわけです。メーカーがリスクをとらずに、自立心も持たずにきたのが今、競争力がない理由にもなっている。

これからのエレクトロニクス産業のマーケットはどうかというと、幾ら自動車でいろいろ使うとかいっても、ユーザーも含めてやっぱりいわゆる情報通信の分野がマーケットですね。そこでどのように国際競争に勝てるかというときに、国内でも競争しないといけないのですけれども、過当競争、いきすぎた競争でお互いに引っ張り合いをして、それで世界の競争に勝てるのかということです。その戦略は今、日本に全然ない。この戦略が国レベルでもなきゃいけないと同時に、民間レベルでもなきゃいかん。通信メーカー、電気メーカーはみんなで分担して、これは自分のところの拠点の分野だ、お

まえのところはこれということで分担して世界で戦わなきゃいけないのに、どの会社もどの会社もすべて全商品をつくるなんていうナンセンスなことをやっている。こんなことをする必要は全然ない。一方、キャリアはキャリア同士で基本料金半額と、そんなばかなことをやっているのですよね。

端末乗りかえというので、どんどん新しい端末をつくっていきます。それは新しい性能のいいものが出来るという面はもちろんいいところはありますが、そればかりやっていると世界で売れるものをつくる暇が全然ないのでですよ。もっと世界で売れるものをつくってパイを広げて儲けることを考えないといけないのに、同じシェアの中で、うちが多い、こっちが多いとかばかりやって、うちを多くするために違う端末をつくるとか、番号ポータビリティとかそんなことばかりやっている。それをスイスから帰ってきてみると、全員同じような方向に向かってバタバタしていると見えました。そして、ちょうど帰ってきたときに総務大臣がやっぱり政治家の感覚で「国際競争力がないのはおかしいじゃないか。一番大事なことじゃないか。早く委員会をつくってやれ」と言って国際競争力強化懇談会をつくったのだけれど、その議論を見たり、レポートなんかを読みますと、オールジャパンでやらなきゃいかんと書いているわけです。さらに、その委員会で議論したメンバーはみんな日本人ばかり、今までと同じ人たちばかりで議論している。国際競争力というのだったら外国の人も呼んできて、何で日本はだめなのかを聞かないのだろうか。

今のご質問に答えるとするならば、一番大事なことは日本の戦略ですね。今、やっぱり国際的にどうしたら勝っていけるのかということで国内政策を考えなきゃいけない。アメリカは何でイラク戦争だとかいろんなことをやっているのか、あるいはフランスはどのようにしてアメリカに従わなかったのかとか、いろんなことすべて、その国々ではどうやったら自分が生き延びていけるかということで戦略を立てながらやっていっているのですよ。

またちょっと話は横道に逸れますが、ヨーロッパの諸国で数百年前に同じ言語をしゃべっていた地域というのはどこにあるかと探すと、なかなか難しい。ヨーロッパは全然違う言葉をしゃべっているわけです。よそから民族がやって来て、勝ち残ったやつがいるのが今のヨーロッパ。そういうことをやってきた国の人たちは、どうやって自分が生き延びていくかということを真剣に考え、それでいろんな戦略が出来てきている。一方、日本は外国と戦ったのはごく数回で、侵攻されたのは元寇と太平洋戦争だけという中で、何かやらなくても放っておいてもそのまま発展出来るというのが大前提になっているのですね。一方、韓国ファンでまた韓国のことを言いますが、韓国はそうじゃなかったわけです。ですから彼らはしたたかで、果敢にいろいろ動いていく。日本人はそこが全くお人よしになってしまっている。同じ繰り返しばかり言って恐縮ですが、そういうことを本当に感じました。ですので、今のいろんな電気通信政策も早く、国内を見るのじゃなくて世界を見るように変わってもらいたいと総務省の若い人たちにも小言を言うけれど、また嫌われて呼んでくれなくなりました。[笑]

[司会] 本日は、どうも有難うございました。

この国際化時代において、近ごろ日本の社会的、国際的地位もだんだん低下している現状でございます。テレビなどを見ても芸能テレビといいますか、ワイドショーがむしろ世の中を動かしているような状況の中で、知的にもだんだん低下しています。また日本人1人ひとりをとっても、若い者でも自分の将来についてしっかりした志が見受けられない。資源のない国でもございますし、少子化社会の状況でもございます。高齢化社会も近づいてきております。本当に日本は今、危機ではないかと思えます。そういうことを考えた場合に、それでは子や孫のためにどうしたらいいかという問題意識も十分に皆さん認識していただきたいと思えます。

今日は本当に素晴らしい、私どもに警鐘を与えてくださるお話をいただきまして、現状認識を新たにいたしました。皆さん方はリーダーでございますので、どうか本日のお話をしっかりかみしめ、明日からまた大いに頑張ってくださいたい。そして日本のリーダーとしての汗を流していただきたいと、このように思う次第でございます。本当に有難うございました。[拍手]

[平成 19 年 9 月 7 日 西新宿エステック情報ビルにて講演]